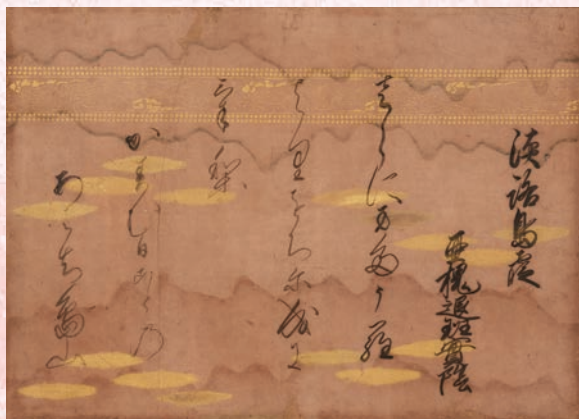


# 春

## 淡路島霞

あわじしまのかすみ

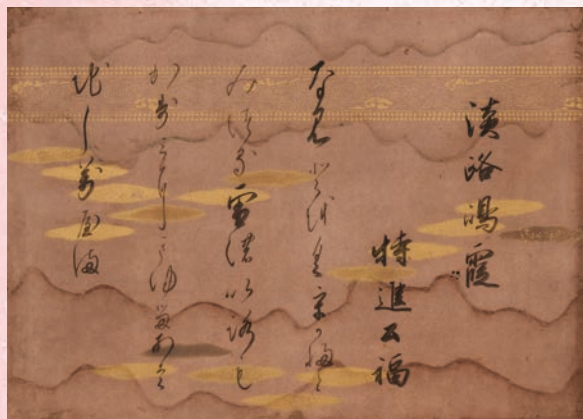


さらにまた浦より遠をちになりけり霞む日ごとの淡路島山

亜槐退班實陰

### 【意味】

春霞のためにこれまで以上に海辺から遠くに見えるようになつてしまったことだ。春の訪れとともに、日ごとに霞が深くなつていく淡路島は。



波遠く浮かぶと見づる雪の色も霞に消ゆる淡路島山

特進公福

### 【意味】

波から遠くに浮かぶように見えた、山に積もった雪の様子も、春になると霞に包まれ、いつのまにか消えていく。そんな淡路島の景色だよ。

## 【解説】

### 「淡路島」

淡路国（現在の兵庫県）の歌枕。兵庫県の西南部沖、瀬戸内海に浮かぶ島。古来より、「御食つ国」として、神や天皇への食物を産出する国として知られた。海から眺めると山が多く見えるので、和歌では「淡路島山」と呼ばれる。

### 「霞」

春の訪れとともに空気中にたなびく、春の象徴。しばしば春の花々や景物を隠してしまうものとして、優美かつ幻想的なイメージが重ねられてきた。

万葉集の頃から和歌に詠まれ、神や天皇を想起させる淡路島と春を象徴する霞を掛け合わせて詠むことで、豊穣の春の訪れを寿いでいます。初春の風物が詠まれた、縁起の良い、十景のはじまりにふさわしい情景です。

### 「参考歌」

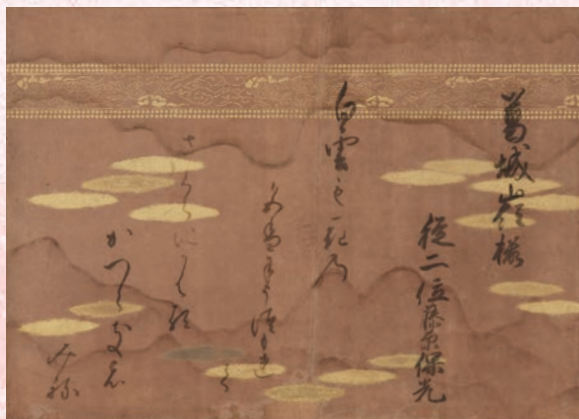
「春といへばかすみにけりな昨日まで波間に見えし淡路島山」

（新古今集・六・春上・俊恵法師）

# 春

## 葛城嶺櫻

かつらぎみねのさくら

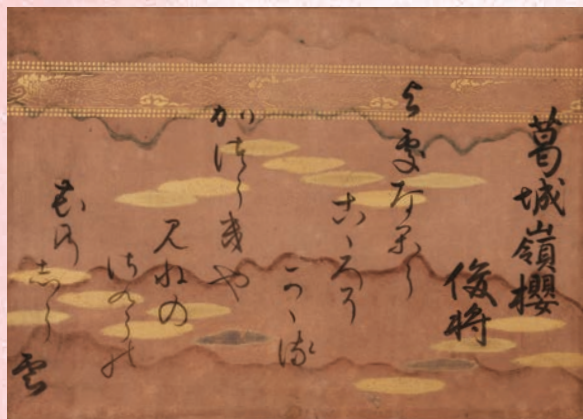


白雲も花の色香に埋もれつつ桜にかわる葛城の嶺

従二位藤原保光

### 【意味】

白い雲までも花の色と香りに埋もれるように見えるほど、桜二面の景色に変わっていく葛城山の嶺であることよ。



よそながら心ぞかかる葛城や嶺の桜の花の白雲

俊将

### 【意味】

遠く離れた場所においても気にかかる葛城山に咲く桜。今頃は山の嶺に白雲のように桜の花が一面に咲いているだろう。

## 【解説】

### 「葛城山」

難波（大阪）または大和国（奈良）の歌枕。現在の奈良県西部と大阪府との境に位置する連山。修験道の拠点の一つ。高山を象徴するように、白雲を抱く様子とともに詠まれることが多い。

### 「桜」

春を象徴する花。「古事記」や『万葉集』においては、「山の花」としてイメージされる。和歌では、山二面に満開に咲く様を白雲に例えて詠まれる。

桜が一面に咲く葛城山、春の風景が詠まれています。白雲の言葉を重ねることで、高い嶺が連なる様子に加え、溢れるほど満開に咲く桜の様子が伝わってきます。

### 「参考歌」

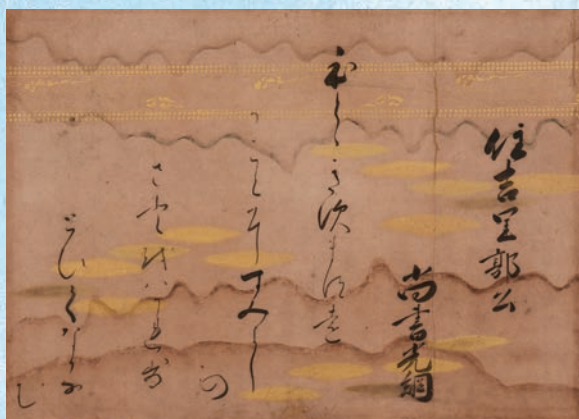
「よそに見る葛城山の白雲に風こそにはへ花や咲くらん」

（続古今・八九・春上・後堀河院民部典侍）

# 夏

## 住吉里郭公

すみよしのみさとほととぎす



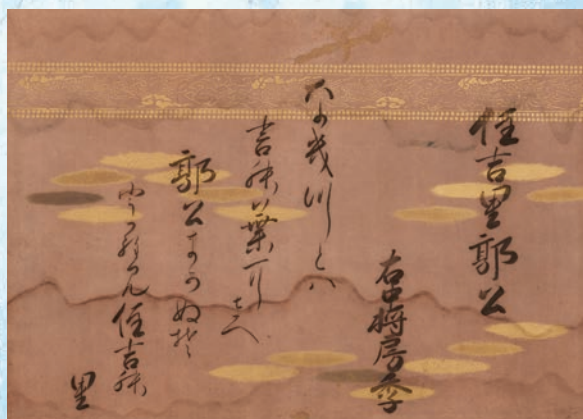
ほととぎす松をかごとに住吉の里を離れずとひて鳴かなむ

尚書光綱

### 【意味】

ほととぎすよ、住吉の松、「待つ人」があることを理由に、この住みよい住吉の里を離れることはないと言って、その美しい声を聞かせておくれ。

\* 「松」は「待つ」、「住吉」は「住みよし」が掛かる



なきつとは言の葉にさへほととぎす鳴かぬぞうらみ住吉の里

右中将房季

### 【意味】

鳴いたとは言葉にさえほど遠い、ほととぎすよ。遠里小野では鳴くのにはここでは鳴かないのも恨めしい、住吉の里であるよ。

## 【解説】

### 「住吉」

摂津国（現在の大阪市住吉区）の歌枕。住吉は海辺の地で、浪が景物として知られる。住吉の神は、当初は航海安全の神、軍神として祀られた。平安後期には、和歌を詠む歌神としても崇拜され、歌人や宮中の貴人が多く参詣した。住吉を歌題とした和歌は多く、代表的な歌枕として知られる。和歌では、海近くに松並木が植えられ美しかったことから、松と取り合わせて詠まれる。「住みよし」と掛詞で詠まれることも多い。

### 「郭公」

ホトトギス科の鳥。五月に渡来し、八・九月頃南方に帰ることから、夏を代表する鳥。その声は『万葉集』の時代から賛美され、美しくも悲しい鳴き声から、人恋しさや物思いの気持ちを込めて詠まれることもある。

夏の訪れを告げるほととぎすは、鳴き声を聞かせぬ鳥として和歌に詠まれてきました。古歌を踏まえて「住吉の松」（「松」に「待つ」を掛ける）と、遠里小野に鳴くほととぎすと、先行歌を踏まえ詠まれています。

### 「参考歌」

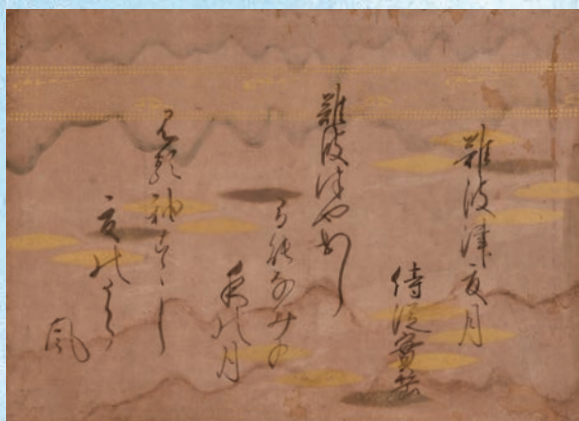
「住吉の松をば知らで郭公とほざとをののかたに鳴くなり」

（治承三十六人歌合・九四・寂念法師）

# 夏

## 難波津夏月

なにはつのなつつき

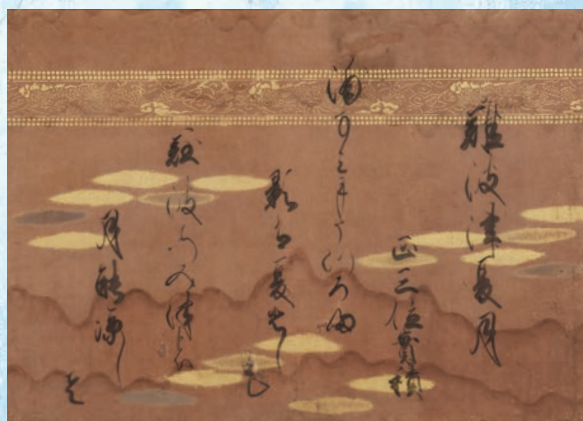


難波津や葦間の波の夜の月見る袖涼し夏の浦風

侍従實岳

### 【意味】

難波津は葦の波間に映る夜の月が美しい。それを見る私の袖にも涼しく川吹く夏の浦風が吹きつけてくる。



浦波に移ろう影は夏としも難波のみつの月の涼しさ

正三位實積

### 【意味】

海の波面にたゆたう月影。夏とはいっても、難波の湊を照らす月の涼しげなことよ

\* 「みつ」は「御津」。難波津は官製の船も出入りするため、「御津」とも呼ばれる。

## 【解説】

### 「難波津」

難波は、摂津国（現在の大阪市上町台地を中心とする地域）の歌枕。難波津は、淀川河口の良港。古代より交通の要衝として知られ、天王寺、住吉参詣へ詣る都からの往来もあった。古くは遣唐使の船が発着した場所であり、参勤交代する西国の諸大名の寄航地として重要な役目を果たした。湿地帯のため、歌においては葦の名所として知られ、海浜の風景とともに詠まれることが多い。

### 「夏月」

夏の夜は短く、月が出ている時間も短い。五月雨の雲に遮られることもあり、月の観賞には適さない時期であるが、平安時代後期以降は、短い夜を嘆き、涼しさを喜ぶ景物として積極的に詠まれるようになっていく。

夏の夜の川辺の涼しさが月のさやけさと二緒に伝わってくる歌です。港町として賑わう日中のイメージとの対比で生きてくる歌でもあります。難波津に停泊する旅人のイメージも重ねて詠むことで、なお二層、この歌の世界観に入れます。

### 「参考歌」

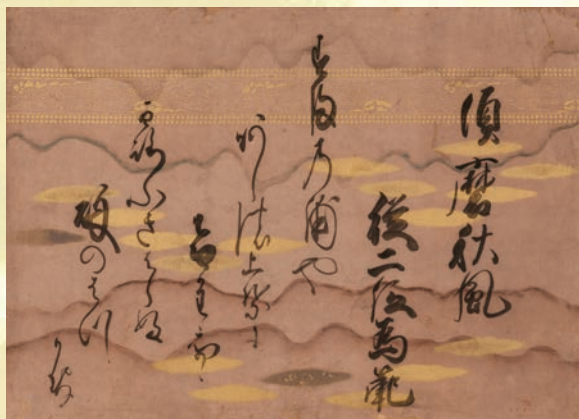
「なには江にやどかる夏の月影はあしこそ草の枕なりけれ」

（林葉集二九〇・水上夏月）

# 秋

## 須磨秋風

すまのあきかぜ

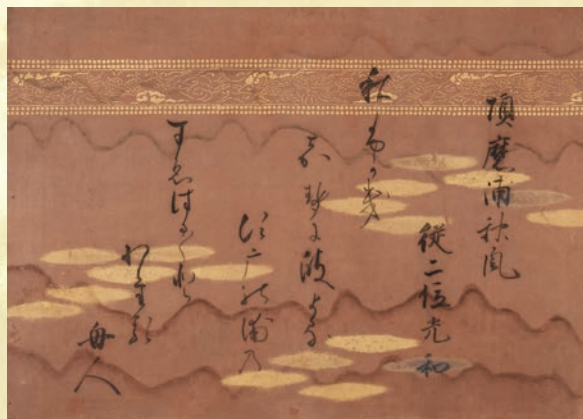


須磨の浦や芹の上葉に音たてて露吹き払う磯の初風

従二位為範

### 【意味】

須磨の浦よ、芹の上の葉にのる露を音を立てながら吹き払う磯の風に、秋の到来を初めて感じることだなあ。



秋深き風に波寄る須磨の浦の末はるばると渡る船人

従二位光和

### 【意味】

秋の深まりを感じさせる風が吹いて、波が寄せる須磨の浦。その浦を見渡すとその先にはるか遠く海を渡っていく船人の姿が見えるなあ。

## 【解説】

### 「須磨」

摂津国の歌枕。「明石」とともに西国へ行く際の交通の要衝で、関所があった場所でもある。現在の神戸市須磨区の海岸付近であり、『枕草紙』の時代から「須磨の関」で知られた。歌の世界では、須磨は「海人」が「藻塩焼く」所として想起され、藻塩が焼焦がされることに掛けて、恋焦がれる気持ちを表す恋歌に登場する。また、『源氏物語』では、二十六歳の光源氏が都落ちをして二年間流浪する地として登場し、さびれた漁村として描写されている。

### 「秋風」

秋に吹く風。歌の世界では、秋の訪れを告げるものとして詠まれ、また「飽き」に掛け、男女間の気持ち冷めるという意を含めて詠まれることも多い。

この題自体が、須磨に流謫して物思いする光源氏の心情を記した『源氏物語』「須磨」の冒頭、「須磨には、いとど心づくしの秋風に、海はすこし遠けれど」を意識していると考えられます。特に、二首目は、「遙かにも思ひやるかな知らざりし浦より遠に浦伝ひして」(源氏物語「明石・光源氏」)を踏まえていると思われれます。

# 秋

## 明石潟霧

あかしがたのきり

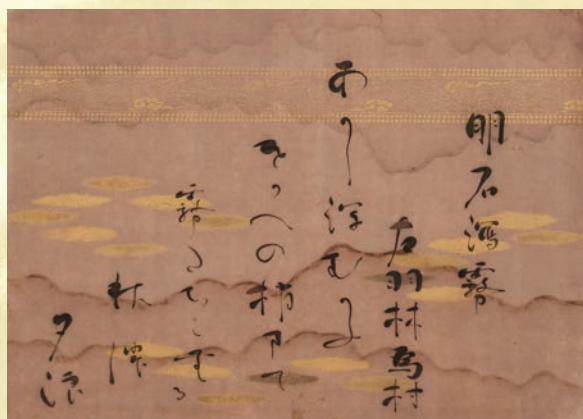


明石潟月は白める浦波に海松布を霧の残す松原

権中納言實岑

### 【意味】

夜が明けて、あたりが薄明るくなるにつれ、月の光もだんだんと弱まり、波打ち寄せる海辺には海松布（みるめ…海藻）があがる。見えるのは松林を残して霧が漂う。



明石潟むかう岡辺の梢まで霧たちこむる秋の夕波

左羽林為村

### 【意味】

明石潟では私が住まう所から向かいの岡のふもとにある梢（枝の先）のあたりまで見えなくなるほど、濃く深く霧が立ち込め、秋の夕べの海では波が立つる。

## 【解説】

### 「明石潟」

明石は播磨国（現在の兵庫県明石市付近）の歌枕。潟は入江のこと。畿内（山城・大和・河内・和泉・摂津）の西端にあたる。遠くに大阪方面の山々が見える場所であることから、旅へ赴く者にとっては慣れた地を後にする覚悟を、帰って来る者にとつても懐かしさと安堵感を感じる場所であった。その字面から「夜を明かす」の意と掛けて歌に詠まれたり、瀬戸内海を臨む海辺であることから「海辺の月」の風景として詠まれてきた。鎌倉時代以降、『源氏物語』で須磨に蟄居した光源氏が身を寄せた地として詠まれることが多い。

### 「霧」

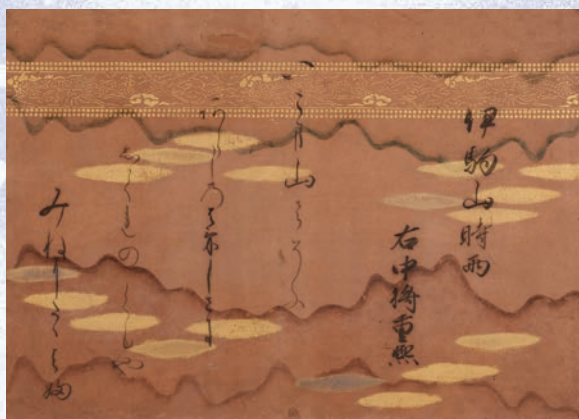
大気中の水蒸気が凝結し細かい水滴となって広がり、煙のように視界を遮る霧。歌の世界では秋の景物として詠まれることが多い。遠景のものをぼやけさせる「霞」と異なり、霧は近くに濃く立ち込め、時に道に迷わせるほどというイメージで詠まれる。また、鬱屈して晴れることのない心情を象徴する景物としてもイメージされてきた。

前者は朝、後者は夕方と時間帯は異なりませんが、霧が深く立ち込め、波が打ち寄せる海辺の情景が詠まれています。二首目にある「岡辺の宿」は『源氏物語』「明石」で明石の君が住まう場所。「海松布」は「見る目」（主に逢瀬）と掛けられることが多く、全体的に『源氏物語』「明石」での光源氏的心情を意識して詠まれています。

# 冬

## 生駒山時雨

いこまやまのしぐれ

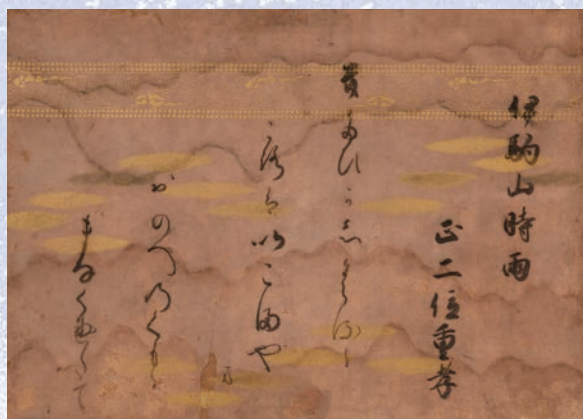


生駒山誘う嵐の激しさに時雨の雲や嶺に漂う

右中将重麿

### 【意味】

生駒山では激しい嵐が吹いているがそれに誘われるかのように、時雨を降らす雲が山の嶺に漂っているよ。



幾度か時雨るるころは生駒山尾上の雲もまなくゆくてに

正二位重孝

### 【意味】

何度となく時雨が降る頃の生駒山。山の頂にかかる雲は、私がこれから越えてゆく先に絶え間なく広がり雨を降らせている。

※この場合の「尾上」は「般名詞」

## 【解説】

### 「生駒山」

大和国の歌枕。現在の奈良県生駒市にある山で、奈良県と大阪府の境に位置する。古来より交通の要衝として知られた。旅人が大和を懐かしく思つて眺めた。「雲」や「雨」ともに詠まれることが多い。

### 「時雨」

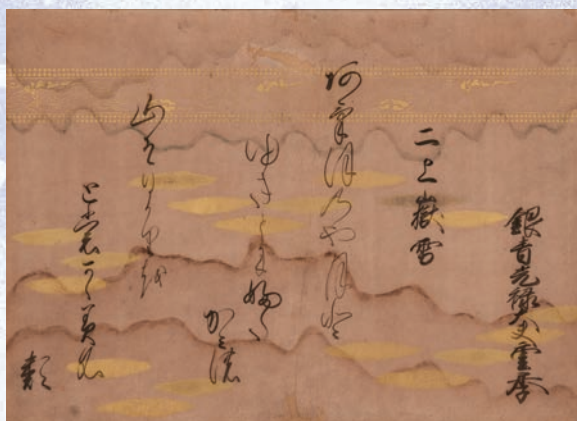
秋から冬に移り変わる頃、空が低い雲に覆われ、雨が降ったり止んだりするさまを時雨という。葉を色づかせるものとして詠まれることが多い。

前者は生駒山に激しい嵐が吹き、時雨を降らす雲は山の一番高い場所・嶺の上に漂っている様子を詠んでいます。後者は、雲がどんよりと山を覆っている冬の暗く寂しげな雰囲気伝わってくる歌です。

# 冬

## 二上嶽雪

ふたかみだけのゆき

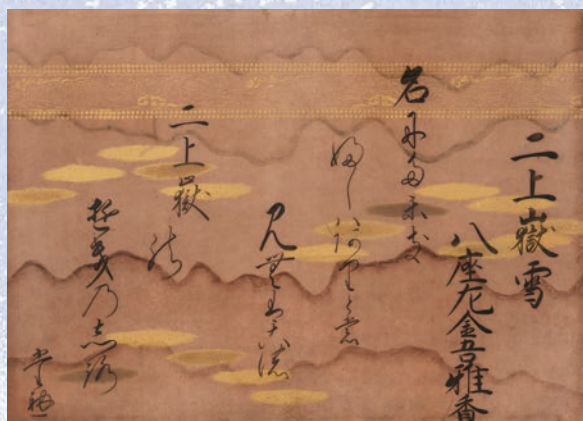


曙や月と雪とに二上の山は光を共鏡見る

銀青光録大夫重季

### 【意味】

夜がだんだんと明けようとする頃、月と雪とで白く輝く二上山。雪の山は月光と照らし合い、まるで合わせ鏡のようであることよ。



名に高き富士はありとも見むはこの二上嶽の雪の白たへ

八座左金吾雅香

### 【意味】

富士の山はよく知られているところですが、二上山の山上に積もる純白の雪を見てごらん下さい。白布のようで清らかで美しいことですよ。

## 【解説】

### 「二上山」

大和国の歌枕。現在の奈良県北葛城郡にある当麻寺背後の山。山頂が二峰に分かれる。大和と河内の境にあり、近くに街道が通うことから、その行き来に目にする山としても知られた。

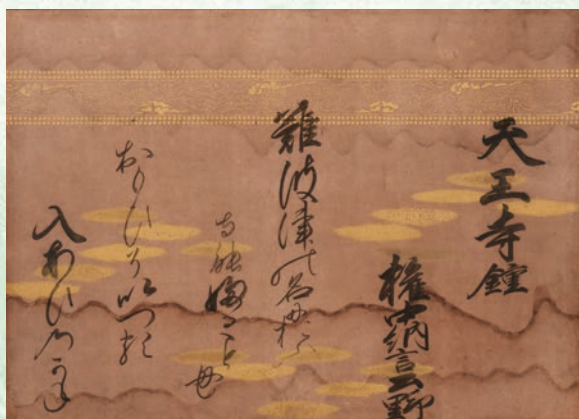
### 「雪」

冬の景物。

前者は明け方の空が白んでいくなか、空に残る有明の月と山上の雪が輝く様子を、後者は富士の山にも劣らない冠雪の清らかさから、二上山を称えています。寒さ厳しくも凜とした空気を感じる冬の情景です。

# 〔雑歌〕 天王寺鐘

てんのうじのかね

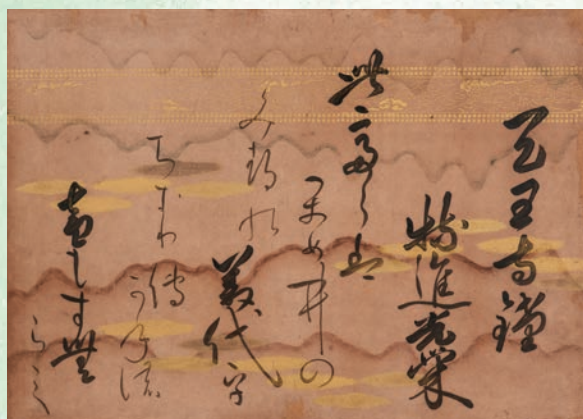


難波津の名に負ふ寺のふることも思いぞ出づる入あひの鐘

権中納言公野

## 【意味】

あの難波津で有名な四天王寺の昔の事なども思い出される、夕暮れに響く鐘の音であることよ。



此寺は亀井の水の方代を契りて鐘の音も澄むらく

特進光榮

## 【意味】

この寺は、古より名水として知られる亀井の清水が永遠に湧き出ることを約束するかのよう、鐘の音も清らかに澄んでいるよ。

## 【解説】

### 〔天王寺〕

四天王寺（現在の大阪市天王寺地区にある）のこと。聖徳大使創建の寺とされ、平安時代から、皇族・貴族が参詣した。天王寺境内から湧き出ている「亀井の水」は、古くから名水として知られている。

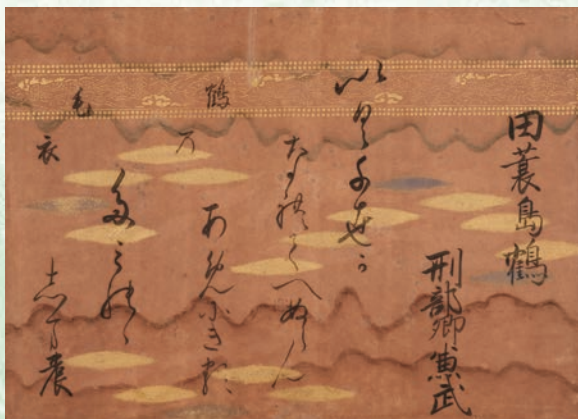
### 〔鐘〕

寺の鐘。ここでは四天王寺内の北鐘堂を指す。その響きは極楽浄土に届くといわれ、「引導鐘」と呼ばれた。平安時代より、天王寺は浄土信仰のメッカであった。

寺院の鐘を主題とした、釈教（仏教に関わる和歌）です。難波十詠のイメージソースである「瀟湘八景」（中国山水画の画題。景勝地・洞庭湖の四季を表す）のうち「遠寺晚鐘」を下敷きに、寺院と鐘の取り合わせで詠んでいます。西方に日が沈む頃、響く鐘の音に西方浄土の極楽を想い、亀井の水に鐘の音の清らかさを掛け合わせることで、天王寺を称えています。

# 〔雑歌〕 田蓑島鶴

たみののしまのつる

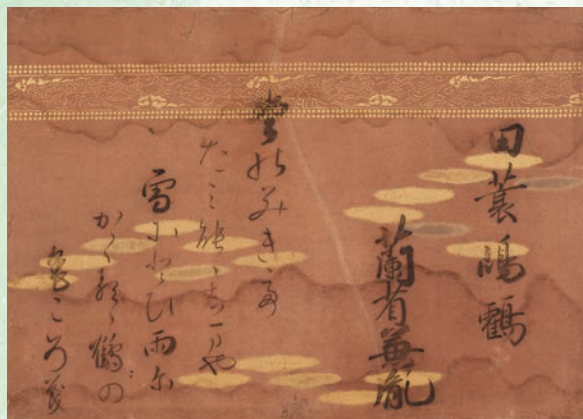


幾千代か馴れて経ぬらむ雨に着る田蓑の島の鶴の毛衣

刑部卿兼武

### 【意味】

もう何代もの帝の御代を着馴れて過ぎしたのだろうか。雨の日に蓑として着る、田蓑の島の鶴の毛衣は。



たのみきて田蓑の島や雪にとひ雨に隠るる鶴の毛衣

蘭省兼胤

### 【意味】

雪が見られるかとあてにして蓑を着て訪れた田蓑の島だよ。雪を見に訪れたものの雨宿りのため隠れている、鶴の毛衣は。

## 【解説】

### 〔田蓑の島〕

撰津国の歌枕。ただし、正確な所在は未詳（説には天王寺の傍らとする）。「鶴」を併せ詠む歌が多く、また、「雨」と「蓑」を取り合わせて詠まれることが多い。

### 〔鶴（つる）〕

ツル科の総称。渡り鳥。亀や松と取り合わせて長寿を歌う吉祥のイメージを象徴する。「鶴の毛衣」は愛情をこめて着せた産着のたとえとしても用いられる言葉で、子を想う親の情の深さに喩えられる。また鶴のその色から雪と取り合わせて詠まれることが多い。

幾代にもわたる天皇の治世を寿ぎ、吉祥のイメージである鶴を重ねた、掉尾にふさわしい、賀（御代を寿ぐ歌）の意味を含めた歌です。

### 〔参考歌〕

「難波潟潮みちくらしあま衣田蓑の島に鶴鳴きわたる」

（古今集九三・雑上・詠み人知らず）